

## 麻田四郎名誉教授記念号に寄せて

藤 井 栄 一

麻田教授が本年4月1日付で規定により退官された。先生は、昭和23年に着任されてから、本学の研究と教育の中心になって御活躍された。この期間は、明治43年に小樽高等商業学校として設置されて以来の本学の歴史の中でも、もっとも困難な時代であった。

着任直後の昭和24年には学制変更により、経済専門学校から商科大学に名称を変更したが、これに伴って必要となった大学理念の確立は極めて困難であったに相異なる。高商・経専として有能なスタッフを抱え、特色ある歴史をもっていたことが、大学としての発展の方向を模索する場合に障害になったとさえ言えるかもしれない。また、「独立昇格」は歴史と伝統を活かす条件であるが、それだけに当時の関係者にとっては重い負担であったようにうかがわれる。

更に、麻田先生の専攻分野である経済学も、当時、急激な変貌をとげていた。戦争中の国家社会主義的な教義は姿を消していたが、1960年代以降受け入れられるようになったパラダイムは未だ不安定な状況にあった。

したがって、この時期に小樽商科大学がもっとも必要としていたのは、するどい洞察力と先見の明をもって自ら研究の先端を担うと共に、大学のあり方について考え、学部組織を立案する研究者であった。大学にとって幸であったことは、この役割を果たす者として麻田先生に頼ることができたことである。昭和30年代にはいった時には、既に、大学は先生を中心に動いていた。経済学関係の分野では全く単独でリーダーの役割を果たし、また、商業学科、管理科学科および一般教育等の組織作りでも関係者に協力しながら多大の影響を及ぼされた。いわゆる大学紛争当時には、学生部長を務められ、形式的にも大学行政に当たられたこともあった。しかし、麻田先生がもっとも努力されたのは、御自身の専門の研究と教育とともに、むしろ陰にあって、長期の視点から組織作りと人材配置に細かい配慮をされたことであった。

大学の制度上の急激な変化と経済理論に対する一般の評価の変化は、時期的にかなり相関しているように見える。新制大学発足はポスト・ケインジアン・エコノミックスの隆盛とほぼ同時だったし、1960年代後半からの約10年は、経済理論のパーспекティブが、形式上はともかく、実質ではかなり変化した。

今、同じようなことが起っているようである。商学部ということからは vocational training にかんがりのウェイトが置かれなければならないとしても、大学の基本理念は全く別のものであろう。他方、経済理論も再び、新しいパラダイムを模索しているかのようである。

この時に、麻田教授が本学を去ることになったことは、残念である。今後とも名誉教授として、長く小樽商科大学の発展に寄与下さることを心から願う次第である。